

ひとりひとりの思い

財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団
アシスタント・プログラムオフィサー
大内 朗子

助成対象団体の方々とお話していると、活動している方々はそれぞれ色々な「思い」を持って活動を進めていることを感じる。そこで、活動内容や実態からではなく、活動を支えている活動実践者の「思い」に注目して、昨年度の助成対象活動を振り返ってみた。「思い」の持主は自分(達)とし、「思い」の相手は活動実践者以外の相手(他人)として、一覧表に整理した。

団体名	活動を支える思い
特活) さっぽろ住まいのプラットフォーム	<ul style="list-style-type: none"> 多様な専門家の一般住民の「住まい力」向上への思い入れ 自分達の専門性(まちづくり)を他人のために
紫波中央駅前コミュニティー・プラザの会	<ul style="list-style-type: none"> 住民自身の「暮らし」「コミュニティ」への不安 自分のため=他人(近隣住民)のため
酒蔵の町天領大山のまちなみに学ぶ会	<ul style="list-style-type: none"> 愛好家が一般住民に「まちなみや建築物を地域資源として認識してもらいたい」という思い 自分達の思いを他人にも共有してもらいたい
特活) 三波川ふるさと児童館 「あそびの学校」	<ul style="list-style-type: none"> 専門家の「子ども」の健やかな成長への思い 子ども好きな自分がしたいこと=他人(地域の子ども)のため
特活) 映画保存協会	<ul style="list-style-type: none"> 専門家の映画フィルム」保存継承への思い 映画フィルム好きな自分達の思いの追求=他人のため(フィルム保存サービス 蔵活用イベント等)
中越震災復興プランニングエイド	<ul style="list-style-type: none"> 地域外まちづくり専門家の「震災後も住民に地域に住み続けてもらいたい」という思い 自分達の専門性(まちづくり)を他人のために
でか小屋再生おせっ会	<ul style="list-style-type: none"> 専門家・住民が一般住民・行政に「芝居小屋を地域活性化のシンボルと認識してもらいたい」という思い 自分達の思いを他人にも共有してもらいたい
まちづかい塾	<ul style="list-style-type: none"> 専門家・住民の「主体的なまちづくり(=まちづかい)」への思い 自分達の思いを他人にも共有してもらいたい
特活) ART NPO TACO	<ul style="list-style-type: none"> 地元アーティストの「地域の風景をつくる蔵」への思い アート・蔵を心地よく感じる自分たちのため=他人のため(蔵を活用したアートイベント等)
きんしゃいきゃんぱす	<ul style="list-style-type: none"> 学生の「子ども」への思い 子どもが好きで研究している自分達のため=他人(地域の子ども 親 商店街)のため
特活) ちば地域再生リサーチ	<ul style="list-style-type: none"> 専門家の「魅力的な団地づくり」への思い 自分達の専門性(まちづくり)を他人(研究フィールドとしてきた地域の住民)のために、他人が実施する事業を創出
コミュニティー・ミュージアム・オーナー・プロジェクト(CMOP)	<ul style="list-style-type: none"> 地域外アーティストの地域活性化への思い アート好きな自分達のため=他人(住民 サポーター)のために、事業(イベント 空き家の管理)を創出

これらの思いが向いている方向、誰のために行っている活動なのかに主眼に置いて、5つの類型に分けた。

(1) 住民の不安を自ら解決	紫波中央駅前コミュニティ・プラザの会
(2) まちづくり専門家による他者への行い	特活) さっぽろ住まいのプラットフォーム 中越震災復興プランニングエイド 特活) ちば地域再生リサーチ
(3) オーソドックスなまちづくり要素(まちなみ 建物 空間))による他者の誘引	酒蔵の町天領大山のまちなみに学ぶ会 でか小屋再生おせっ会 まちづかい塾
(4) 近年のまちづくりに活用される要素(アート 子ども)を自ら追求	特活) 三波川ふるさと児童館「あそびの学校」 特活) ART NPO TACO きんしゃいきゃんぱす コミュニティ・ミュージアム・オーナー・プロジェクト(CMOP)
(5) これまでのまちづくりにあまり活用されなかった要素(映画フィルム)を自ら追求	特活) 映画保存協会

(1)の紫波中央駅前コミュニティ・プラザの会は、自己責任・当事者意識を強く感じて自発的に動き出した活動である。まずは自分の生活をどうにかしたい(買物に不便、コミュニティスペースがない)という不安を出発点にしている。個人が抱える不安が地域住民の課題や不安でもあることをアンケート結果から確信し、自ら動き出した自己完結型の活動である。

(2)は、自分達が持っている知識・技術・経験を地域の住民に対して役立てようというもの。特活) さっぽろ住まいのプラットフォームは、近い将来誰にでも起こり得る居住継続や住替え問題に備え、住民の意識を喚起し、専門性に裏打ちされた解決策を講じようとしている。中越震災復興プランニングエイドは、中越震災の復興を目的とし、過疎化や地域住民の高齢化にすぐに対処しなくてはならない緊急性の高い活動である。特活) ちば地域再生リサーチは、地域を研究フィールドにしてきたまちづくり専門家集団であるが、活動として特筆することは住民による互助事業の確立に貢献している点である。自らが事業のプレーヤーになるのではなく、地域に眠る人的資源を活用した事業を仕掛けている。

これらの(1)、(2)とも「~しなくてはならない」状況があることに立脚した活動である。

(3)は、まちづくりの定番といえる。地域に存在する資源に住民の意識を喚起し、地域の活性化につなげる活動である。酒蔵の町天領大山のまちなみに学ぶ会は、地域外の専門家の指摘をばねに住民の視線を地域に向けようとし、でか小屋再生おせっ会は、芝居小屋を核としたまちづくりを住民のみならず、行政にアピールすることで今後の活動の規模を拡大させようとしている。上記2団体がその地域固有の資源に注目しているのに対し、まちづかい塾は、どこにでもある公共空間を活用したまちづくりを提案している。そのために住民の自発的な活動がより簡便に行えるようにカフェハウスを建設した。この団体の活動の面白い点は、コーヒーを提供される側ではなく提供する側がお金を出し合って活動が成立していることである。能動者を主役と捉えている。そして多くの住民が主役として登場することを願っている。この類型は自分達の信念に基づいて「~に気付いてもらいたい ~してもらいたい」という要望、希望を背景とした活動である。

(4)(5)とも活動者自らが対象物(者)への興味や「好き」という思いがあってこそその活

動である。特活)三波川ふるさと児童館「あそびの学校」ときんしゃいきゃんぱすの主な活動対象者は子ども。各々のコアメンバーの属性が元児童館職員と教育学部の学生で、普段から子どもを主眼に置くことに何の違和感も感じさせない。そして双方のコアメンバーとも子どもが大好きで、子どもの笑顔が自分達の一番うれしいごほうびだと真に感じている。子どもの笑い声で古民家や空き店舗が魅力的に映る。また、アートを活用しているのは特活)ART NPO TACOとCMOP。アートというと門外漢だと感じる人も多いかと思うが、2団体とも特異な世界を追求しているわけではない。TACOは存亡の危機に瀕した古くからある蔵を 自らの拠点と活用スペースに転じた。蔵を地域資源として捉えている点では(3)と同じだが、地域の文化やアートの水準の向上を目的として、蔵の魅力づくりを追求している点で(3)と一線を画す。CMOPはアートを施した空き家や廃校の販売(命名権を含む)を手がける。これは、過去10年にわたる芸術祭を核とした地域づくりという実績があってこそその活動だ。高名なアートディレクターという存在はあったにせよ、地域住民の心を開き、個人の資産である土地や家屋の活用にまで踏み込めるようになった。地域の歴史や文化を大切に扱った上でのアートの活用が、成功の鍵を握っている。

最後に(5)に分類した特活)映画保存協会は、古民家と蔵という地域資源を活用してはいるが、まずそのような資源ありきの活動ではない。この団体は、映画フィルムを愛好する専門家の集まりで、映画フィルムの文化的価値の向上に活動の主眼を置いている。映画を観てもストーリーよりも画質等にまず目が行く、とコアメンバーはおっしゃっていた。そのような嗜好のある人たちが地域(谷根千)と結びつき、手に入れた古民家と蔵にも文化的価値を置いて愛情を注いでいる。谷根千という地域性も活動を加速させているともいえる。

このように(4)(5)はまちづくりがまずありきではなく、人間の自然発生的な思い「好き」「心地よい」「極めたい」が活動を支えている。

夏目漱石の「私の個人主義(講談社学術文庫)の中に「道楽と職業」という講演録が載っている。道楽という言葉には概してあまり好ましくないイメージがあるが、漱石はそのような偏ったイメージでこの言葉を捉えていない。「道楽は好いた刺激に反応して自由に活力を消耗すること。物質的生産に直接に関係せず、精神的に己のためにすること」とある。「職業は他人本位で、人のためにするもの。自己を曲げる、己を捨てる必要もある。ただ科学者、哲学者、芸術家は他人本位では成り立たない職業である」という。

私は助成対象団体の活動を道楽か職業かに分別したいのではない。この「道楽と職業」というくくりを超越したところにNPOは存在すると考える。どの活動も道楽的でもあり職業的でもある。人のため(人に受け入れられる)という思いが主軸になっている活動にも自己を追求する場面もある。また、その逆もいえる。だからそれだけ自由なのだ。自分が居住したり関与している地域への愛着はもちろん、一見まちづくりとは無関係な事物を好きだ、極めたいという思いも地域と結びついたとき、まちづくりに関係ないとは言えなくなる。一人ひとりの思いが、まちをかたちづくるコトやモノ、私たちの生活にはなくてはならない何物かを創り出す入口になる。思いをかたちづくる仕方には様々なレベルがあるかもしれないが、各人の「思い」にはレベルの差などない。

さらに漱石は「己のためにする仕事の分量は人のために(人の言うがままに 欲するがままに)する仕事の分量と同じであるという方程式が成り立つのであります。」と続

ける。「自分の力に余りある所、すなわち人よりも自分が一段と抽（ぬき）んでている点に向って人よりも仕事を一倍して、その一倍の報酬に自分に不足した所を人から自分に仕向けて貰って相互の平均を保ちつつ生活を持続するという事に帰着するわけであり
ます。」

格差社会が声高に論じられる現代社会では、この均衡は崩れているのかもしれない。しかし、意識的にせよ無意識的にせよ、人々が、各人の過不足分を補おうとしながら（思いながら）生きている姿は昔も今も変わらない。